岩手・志羅山遺跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山
2　調査期間　第七七次調査　一九九八年（平10）六月～八月
3　発掘機関　平泉町教育委員会
4　調査担当者　鈴木江利子
5　遺跡の種類　屋敷跡
6　遺跡の年代　一二世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

志羅山遺跡の所在地は、ＪＲ東日本平泉駅の西側に広がる地帯で、商店や町役場、銀行などが建つ、平泉町では最も建物の密集する地域である。そのため開発に伴う発掘調査の機会も多く、なっている。特に一九九二年から実施されている都市計画街路整備事業に伴い、調査面積は広がった。点であった調査個所が、徐々に面的につながって、奥州藤原氏時代の区画溝や道路、建物など多くの遺構が検出され、当時の街並みや生活が明らかになりつつある。

（一　関）

調査は、右の都市計画街路整備事業に伴うもので、第七七次調査区は南北二〇ｍ東西一〇ｍの範囲で行なったが、そこでもこれまでの成果に関連する区画溝や塀の他、井戸や柱穴・池などを検出している。また調査区の南側は土を埋めて整地がされているが、その前後の時期にも遺構が存在する。

出土遺物は、かわらけ・陶器・磁器・鉄釘・木製品などである。調査地は低地であり水分が多いため、木製品は良好な状態を保っていた。井戸からはくり貫いて作られた木製容器・箆・椀底部、溝からは仏具（？）・砧状の物・櫛などが出土している。

今回紹介する塔婆が出土したのは、南西隅の調査区外に向かって落ち込む個所で、溝や土坑などの遺構なのか自然地形なのか、全容は明らかでない。他の遺構との切り合いから、年代は一二世紀と考えている。墨書のある塔婆は六点出土していて、他に板や杭・かわらけ・石なども混じっていた。珍しい物として、上層からは黒色漆の地に赤色漆でカエデの模様を描いた皿も出土している。

他の遺構も一二世紀と考えているが、池からは一三世紀の特徴をもつかわらけが多く出土していて、年代に広がりがみられる。

なお塔婆は他に同様の形状のものが一点出土しているが、墨書は見られない。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「〻南无十方三世佛」　(256)×16×6　061

(2)　「〻南无佛法擁護多門天等」　366×18×2　061

(3)　「〻南无妙法蓮華経」　365×16×3　061

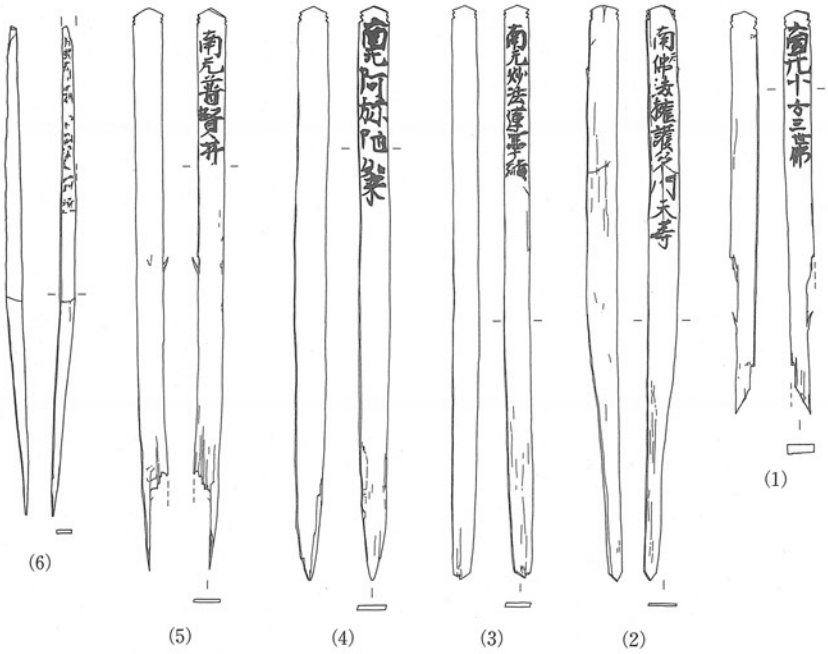
(4)　「〻南无阿弥陀如来」　364×18×3　061

(5)　「〻南无普賢廿」　(357)×16×2　061

(6)　「□□□」　(311)×(10)×2　061

塔婆の形態は、細長い板状の頭部を山形にし、左右に二段の切り込みを設けている。ただし(6)は、頭部から左側面にかけて破損していて不明。下端部は(2)(3)が山形で、(4)(6)は尖っている。(1)と(5)とは、下端部が破損していて形は不明。長さは、完形の三点が三六五㎜前後でほぼ等しく、意識して揃えたとも考えられる。

いずれも文字は表面にのみ書かれている。(6)は墨痕が比較的明瞭であるが、判読できない。

木簡の釈読では、(財)岩手県埋蔵文化財センター羽柴直人氏、水沢市埋蔵文化財調査センター佐藤良和氏・千葉和弘氏・高橋実央氏のご教示を得た。

（鈴木江利子）